三田ふるさと学習館

三田の古代
常設展示物

歴ネットさんだ考古部会

常設展示物の紹介

ここでは「三田ふるさと学習館」で長期にわたって展示されている資料を紹介します。　展示されている遺物は、全て三田で出土した本物です。

来館して実際の色や質感を、ご自分で感じていただけましたら幸いです。

博地谷古墳の陶棺

博地谷古墳の陶棺

兵庫県指定有形文化財

- 須恵質四柱家型の陶棺で、ほぼ完全な状態です。
- 蓋の長さ1.58m、幅50cmで、脚が3列×8個の24個が張り付いています。
- 蓋小口には穴が開いており、庇がついていて、前に2つの小孔を垂直に開け、栓をはめ込むようになっています。
- 中からは骨と歯が出土しており、2体の成人が葬られていました。

博地谷古墳

古墳時代後期

・青野川の右岸、県道曽地中三田線の西側に所在した古墳で、武庫川へと北東からのびる丘陵先端部の緩斜面上（標高194.5m）に位置します。

・昭和26年（1951）、開墾作業中に陶棺を埋葬した横穴石室が発見され、地元研究者や有志によって発掘調査が行われました。

・墳丘は発見当時にその多くが削平されており、わずかな隆起が認められたにすぎず、墳形・規模などの詳細は不明です。

・石室の大半は破壊されていましたが、埋葬施設は南西に開口する無袖式横穴式石室であると考えられ、奥壁とそれに接する両側壁には3段の石積みが残っていました。

上人松古墳の須恵器大甕

写真 252　上人松古墳出土大甕の旧状
（文献８より）

上人松古墳と須恵器大甕

6世紀後半

- 上人松古墳は大甕出土古墳 とよばれていましたが、現在は地名から上人松古墳とよばれています。
- 古墳は現存せず、規模などの詳細は不明です。
- 大甕は旧加茂小学校に所蔵されていましたが、その後青野ダム記念館を経て、現在は三田ふるさと学習館で展示されています。
- 焼成時における底部の割れと後世の欠損以外は、完全に近い状態で残っている貴重な資料です。
- 古墳から出土する1mを超える須恵器甕は粉々に粉砕されている事が多く、発見された場所は古墳以外の遺跡であった可能性も考えられます。

溝口遺跡の打製石器群

溝口遺跡

後期旧石器時代（前半）

・相野川右岸に広がる段丘面の最上位面に立地し、標高200m前後、川床面との比高差は10～15mです。

・旧石器時代の遺物は縄文時代のものと混在して出土しましたが、出土深度がやや深く、石器ブロック（集中部）6ヶ所と礫ブロック1ヶ所が検出されたことから、石器群全体としては一括性を保持しているとみなせるようです。

・旧石器時代の石器1121点の内、出土地点が明らかな資料は1088点で、主にナイフ型石器・スクレイパー・石斧などが見られ、二次加工のある剥片が含まれています。

・石器ブロックから復原された「世帯ユニット」は、後期旧石器時代前半期の集落構造を復原する基礎となり、本遺跡での重要な成果といえます。

加茂・六地蔵遺跡の縄文土器　深鉢と浅鉢

深鉢の胴部片

波状口縁を有する深鉢片

浅鉢の胴部片

加茂・六地蔵遺跡

縄文時代後期

・青野川左岸に立地し、標高155.3m前後で、青野川・武庫川・内神川の三河川の合流域に位置しています。

・北東から張り出した三田段丘面から谷底平野への地形変換点付近に遺跡はあります。

・縄文土器は、波状口縁を有する深鉢片、深鉢の胴部片、浅鉢の胴部片、注口土器の注口部の4点が出土しており、縄文時代後期のものと考えられています。

・深鉢を伴った土坑やその周辺の柱穴群は、同時期の遺構とも考えられ、周辺部に複数の遺構が遺存している可能性が高いと思われます。

上井沢・小屋垣内遺跡の土器

住居跡一括出土土器

ミニチュア土器

- 普通の土器を真似た物が多く、色々な形があり、中には模様をつけて丁寧に作られています。
- 使用用途は、子供のおもちゃ、祭祀に使用、などの説がありますが、はっきりしていません。
- 大きい方は製塩土器とも考えられますが、高さ6.5cm・直径4.6cmで、台の付いたコップのような形をしており、指先で形作られ、口の端が内がわに傾いています。
- 小さい方は壺だと思われますが、口の直径は3.8cmで底の部分がなく、これも指先でつくられたと思われます。

上井沢・小屋垣内遺跡の土器　一括出土土器

上井沢・小屋垣内遺跡

縄文時代、弥生時代中期・後期

- 青野川が武庫川と合流する地点の北側にある段丘上に位置し、標高は167m前後、沖積低地との比高差は約10m、台地は段丘崖を形成しながら南に向かって傾斜しており、台地東西両端は崖になっています。
- 弥生時代後期の竪穴住居跡は3棟（円形1、方形2）出土していますが、近辺にまだ埋もれている可能性が高いと思われます。
- 円形住居跡は直径5～6m、方形住居跡のうち1棟は一辺5mの方形で消失住居の可能性が高いようです。
- 方形住居跡の残る1棟は一辺4.9mの方形で、床面には甕・壺・鉢やミニチュア土器と鉄鏃などが残されていました。

岡ノ谷古墳の須恵器　醁（はそう）

・胴部に小さな穴のある酒等の液体をそそぐための須恵器で、祭祀に使用されたと考えられています。
・節を除いた竹のストローのようなものを胴体の穴に刺して使用したと思われます。
・三田の奈良山古墳群からは、振ると音のする鈴器台付醁という珍しいものもみつかっています。
・なお「醁」という字は考古学上でのみ使用される漢字です。

岡ノ谷古墳の須恵器 提瓶（ていへい）

- 壺を押しつぶしたような形をした須恵器で、「さげべ」とも呼ばれています。
- 丸い胴体の側面にラッパ状の口をつけ、肩部に一組の耳が付いています。
- 耳に紐をつけて水筒のように使われたと考えられるが、持ち運びが困難なぐらい大きいものも見つかっています。
- 耳の形は、古い時期のものは輪状で、次第にカギ形へと変り、さらにコブのように退化し、最後にはなくなったと考えられています。

岡ノ谷古墳の須恵器　広口壺と高盃

岡ノ谷古墳の須恵器　短頸壺

岡ノ谷古墳の須恵器　長頸壺

岡ノ谷古墳の須恵器　蓋杯

色の違いは焼成条件の違い？

岡ノ谷古墳の土師器　壺

土師器（はじき）

5世紀ごろに朝鮮から登窯で焼成する灰青色の須恵器（すえき）が伝わると、両者を区別するため、古墳時代の茶褐色の土器は「土師器（はじき）」と呼ばれるようになりました。

岡ノ谷古墳

古墳時代後期

・千丈寺湖の北部、末西公園内にある直径約20mの円墳で、約1500年前に築造されたと考えられています。

・1976年の発掘調査時には、墳丘の3分の1がすでに削減していましたが、埋葬施設である横穴式石室は良好な状態で残存していました。

・発掘当時、石室内には多量の土砂が流入しており、深いところでは1m近くありました。

・この土砂の流入によって、盗掘などによる遺物の流出は少なかったと考えられ、須恵器・土師器・鉄器・耳管・玉類など多数の遺物が出土しています。

天神遺跡の石器　石包丁（穂摘具）

- 米作りが伝わって出来た石器で、稲の穂を刈り取るためのものです。
- 胴体にある2つの穴に紐を通して、指にかけて使用した考えられています。
- 石包丁という名ですが、「切る」のではなく「摘み取る」道具だったようです。
- 三田市内では、「塩田石」製のものが多いです。
- 「塩田石」製の石包丁は大阪府の南部からも見つかっています。

天神遺跡の石器

磨製石剣

・弥生時代初期に西日本～東海地方で使われた石製の剣です。

・北九州では石剣が刺さった人骨が出土しており、青銅や鉄の武器が伝わる前に使われていました。

・米作が伝わり、水田用の土地をめぐってムラや集団が争ったとき、石鏃などと一緒に使われた武器と考えられています。

・最古の石剣は佐賀県の菜畑遺跡で発見されており、ここからは日本最古と思われる水田も発見されています。

天神遺跡

弥生時代中期～後期

・武庫川西岸丘陵部が三田盆地に突き出た位置で、天神台地と呼ばれる北西端に立地しています。
・出土土器は弥生時代中期中葉以降のものが中心で、大半がⅣ様式です。
・居住者が集落・墓を営み、盛んに活動していたのは、中期後葉という限られた期間であったと判断されます。
・遺跡は中期末をもって断絶したと考えられ、中期以降環濠で防御された台地上に、居住する必要がなくなった可能性が高いと思われます。
・中期後葉における石包丁製作や糸魚川産ヒスイ製勾玉、四国系・丹波系土器の存在は、西摂津地域を中心に東播磨地域やその他の地域と広く交流が行われていたことを示しています。
・方形周溝墓は5基検出されていますが、数10基は存在したと推定されています。
・石鏃には、形態から縄文時代に属する可能性のあるものもあります。
・石包丁は溝・斜面から非常に多く出土しており、大半が「塩田石」で、未製品も多いことから、石包丁を製作していたことがわかっています。

高次・北ノ垣内遺跡の土器

高次・北ノ垣内遺跡の土器

高次・北ノ垣内遺跡

弥生時代後期～古墳時代

- 三田盆地中南部の武庫川北岸にある低地部との比高差60～80mの丘陵の南側麓屑面および小支谷の扇状地上にあり、標高は152～153mです。
- 調査の結果、上面遺構には平安時代～鎌倉時代の溝・掘立柱建物跡数棟があり、下面の弥生時代後期～古墳時代のものは溝・土坑が主体であり、他に竪穴住居跡状の落ち込みが1ヶ所存在していました。
- 溝から出土した多量の土器は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の庄内式期にあたり、庄内式期最古段階から新段階まで認められました。

古城遺跡の蛤刃石斧と炭化米

古城遺跡

弥生時代中期

- 三田盆地中南部に位置し、武庫川に突き出た台地東端に立地、標高は160m前後で、北側低地とは15mの比高差があります。
- 数次の調査により、幅1.8m、深さ約50cm、断面U字形の溝や方形周溝墓、土坑が検出されています。
- 土器は弥生時代中期前半～中期後葉の特徴を示すものが出土しており、石器は打製石鏃・錐や磨製の蛤刃石斧、「塩田石」製の石包丁とその未製品が出土しています。
- 周溝内からは碧玉製管玉が4点出土しています。
- 古城遺跡の西側には天神遺跡があり、遺跡中心部分では600m離れているが、検出遺構は約300mの間隔であることから同一遺跡とする考えもあります。

いかがだったでしょうか？
興味がわきましたら、ぜひ「三田ふるさと学習館」におこしください。　これ以外にも、多数の遺物を展示しております。